

岩手大学環境マネジメントシステム 10年史 2006（平成18）年～2018（平成30）年



2019年（平成31年）3月
岩手大学環境マネジメント推進室 編

目次

初代・環境マネジメント推進室長 大塚尚寛先生 インタビュー	- 1 -
岩手大学環境方針制定.....	- 10 -
岩手大学環境マネジメント推進本部設置.....	- 11 -
岩手大学環境マネジメント推進室設置	- 11 -
環境報告書 2006 公表.....	- 12 -
環境マネジメントシステム規格 ISO14001 認証取得キックオフ宣言.....	- 12 -
岩手大学環境マネジメント学生委員会発足.....	- 13 -
EMS 公開セミナー	- 15 -
岩手大学環境人材育成プログラムの構築・継続.....	- 16 -
岩手大学環境人材育成プログラム認定資格「岩手大学環境管理実務士」授与式.....	- 16 -
2009 年度環境マネジメントシステム内部監査	- 18 -
第 1 回エコ大学ランキング総合第 1 位受賞.....	- 19 -
環境マネジメントシステム国際規格 ISO14001 認証取得.....	- 20 -
第 2・4 代・環境マネジメント推進室長 小川智先生 インタビュー.....	- 21 -
「第 21 回地球環境大賞」文部科学大臣賞受賞	- 29 -
第 3 代・環境マネジメント推進室長 西谷泰昭先生 インタビュー	- 30 -
「サステイナブルキャンパス推進協議会第 2 回サステイナブルキャンパス賞 2016 「学生活動・地域連携部門賞」受賞	- 35 -
「第 19・20 回環境コミュニケーション大賞」「環境配慮促進法特定事業者賞(第 19・ 20 回環境コミュニケーション大賞審査委員長賞)」受賞.....	- 36 -
第 2・3 回サステイナブルキャンパス・アジア国際会議 (ACCS: Asian Conference of Campus Sustainability2016・2017) “Excellence Award” “Excellent Influence Award” 受賞.....	- 37 -
環境マネジメントシステム規格エコアクション 21 認証取得.....	- 39 -

初代・環境マネジメント推進室長 大塚尚寛先生 インタビュー

環境マネジメント推進室長任期：
2008年（平成20年）10月
～2011年（平成23年）6月

聞き手

中島清隆（環境マネジメント推進室
副室長）

赤谷隆一（環境マネジメント推進室員
／技術部技術室長）

インタビュー日時：

2018年（平成30年）3月22日



岩手大学における環境マネジメントの歴史について

岩手大学で環境管理システムが立ち上がったのが、2005年度（平成17年度）です。学長を最高環境責任者とする環境管理システムの組織を立ち上げました。

2006年（平成18年）1月に、岩手大学環境方針を制定しました。これは、今でもバージョンアップしながら、学内のいたるところに貼ってあります。環境マネジメントシステムの一番ベースになるところができた。私はその頃から、工学部（現：理工学部）の担当委員として関わっていました。

いよいよ本格的に始動ということで、環境マネジメントを審議する機関として、環境マネジメント推進本部（現：環境マネジメント推進委員会）ができました。同時に、学部を単位としたユニットの環境目標を設定して進めていく現在も続けているスタイルが始まっています。

この動きを大きくせざるを得なくなってくる外的要因として、いわゆる「環境配慮促進法」（環境情報の提供の促進等による特定事業者等の環境に配慮した事業活動の促進に関する法律）が2005年（平成17年）4月に施行されたことがあります。2004年（平成16年）4月に、国立大学が法人化した国立大学法人は必ず環境報告書を出しなさいというノルマがかかってきた。岩手大学としても動かざるを得なかった。

ただ、岩手大学はただ単に受け身ではなくて、環境報告書の作成・公表を積極的に進めていきたいと思いますという意識が高かった。それは、他大学より先んじて環境マネジメントの運営や環境マネジメント学生委員会が立ち上がる動機になっていたと思います。

2008年（平成20年）6月、藤井克己学長が環境を重点におく方向性を示されました。環境担当の副学長も設置するというので、私が関わっていたこともあって、副学長に就任しました。藤井学長体制は6月からでしたが、組織として、現在の環境マネジメント推進室が4月から実はスタートしていました。

同時に、ISO14001の認証取得を目指そうということで、藤井学長体制が6月5

日にスタートして間も無く、6月27日にキックオフ宣言をしています。4月から下準備はしていましたが、迅速に動いたところがあります。

大学の方向性として、トップではなくボトムアップで動かなければいけない。各学部で中心となるメンバーの方々に進めていただいた。当初のメンバーとして、人文社会科学部は笹尾（俊明）先生、教育学部は梶原（昌五）先生、工学部（現：理工学部）は高木（浩一）先生、農学部は小田（伸一）先生。その他にも、大学教育総合センター（現：教育推進機構）の福永（良浩）先生（現：九州産業大学）と三木（敦朗）さん（現：信州大学）が、非常に一生懸命取り組んでもらいました。いつもそのメンバーと一緒に骨格を作っていた記憶があります。

それから、環境マネジメント推進室ができて、事務的なこともかなり行わなければいけない。伊藤進さん。事務の一番ベテランで、規則を作るなどに取り組んでいただいていた。また、電気使用量やCO₂排出量の岩手大学の細かいデータ把握では、赤谷（隆一）さんが技術職員として大いに力を発揮してもらって、今日に至っている状況があります。

岩手大学で、なぜISO14001認証取得を目指していたか。グローバルスタンダードを目指しましょうということで、日本の企業は比較的早く取りかかっていたが、大学も当時目を向け始め、認証取得を始めている時期でした。岩手大学は、ワンキャンパスで全学部が一か所に集まっているので、上田キャンパス全部を最初から認証取得の範囲とすることで進めてきました。このような意味では、余計に学部の連携、ボトムアップが必要ということで、かなり頻繁に打ち合わせや委員会も開きました。

ISO14001認証取得はPDCA（Plan 計画・Do 実施・Check 確認・Act/Action 見直し）を回すことが一番基本です。岩手大学が法人化して、中期目標・中期計画というプランニングをして（Plan）、それに沿って実践して（Do）、その結果を1年単位で6年間チェックをして（Check）、見直し（Act/Action）を行い、次につなげる動きもありました。このようなことを大学全体の意識づけを行って、教職員にしっかり持ってもらうということはありません。

もう1つ重要なことは、やはり学生の意識づけです。岩手大学はESD（Education for Sustainable Development：持続可能な発展のための教育）をちょうどその時期に取り込んでいました。全学共通教育（現：教養教育）で行っている環境意識教育と、4学部でも環境に関わる科目がかなり開講されています。横軸を全学のESD、縦軸の柱の1つを各学部の専門性で裏づけされた環境教育、そしてもう1つの縦軸の柱として、後からISO14001の環境マネジメントシステム認証制度を加えて、いわゆるπ型と表現しました。大学における色々な予算の獲得は文部科学省に行いますが、この環境教育プログラムは環境省に出しました。当時は玉（真之介）先生（現：徳島大学）が教育担当、私が環境担当副学長の立場から2人で色々案を練って出して、それが通ったことも大きな後押しになったと思います。

2008年（平成20年）10月に、環境マネジメント学生委員会を発足させようという動きが出ました。学生の気運も高まってきたところがあったと思います。

かなり積極的に学生も参加してもらいました。例えば、PDCAを回していく色々なところで学生にも関わってもらおうということで、2009年（平成21年）6月、環境マネジメントシステム内部監査に参加してもらいました。大学が環境マネジメントを運営している現場で学び、実践的な力をつけてもらう。また、環境マネジメント学生委員会が、信州大学や千葉大学など、岩手大学よりかなり先行していた大学とも交

流も持つようになったのが現在に至っていると思います。

2009年（平成21年）に、「第1回エコ大学ランキング」（特定非営利法人全国青年環境連盟（エコ・リーグ）Campus Climate Challenge 実行委員会主催）が始まったので、まず応募してみようとなりました。赤谷（隆一）さんや伊藤（進）さんにも色々作ってもらって、Webで私も申し込みました。意外にも総合第1位が獲れました。π型の環境教育プログラムで実践的な活動も行ってたこと、実務的には経費削減の観点で省エネやCO₂排出量削減に取り組んでいて、そのような回答項目が意外に多かったので、多分そこがぴったりヒットしたと思います。

目指すべきところは、第1期中期目標・中期計画に入っていたISO14001認証取得でした。2010年（平成22年）10月末に審査を受けました。ちょうど審査日程の最中に教育学部敷地内で火事が出て大変でした。まあ、なんとかISO14001認証取得ができました

年が明けて、2011年（平成23年）3月、ちょうど地震があった時も3人で打ち合わせしていました。私はその辺まで携わりました。

岩手大学における環境マネジメントシステム運営と教育・研究活動・学生参画の連動

Q 岩手大学が国立大学法人になり、環境配慮促進法で国立大学法人に環境報告書の作成・公表が求められた。ただ、岩手大学は受け身ではなくて積極的に取り組んできたとお話いただきました。この出来事を契機として、環境マネジメントシステムを確立し、ISO14001認証取得まで進め、環境マネジメントに教職員が取り組むだけではなくて学生参画も実現し、環境マネジメントシステム運営を教育や研究活動、大学の本業に組み込むように進められていきました。当時どのような話があって、このような方向に進まれていったのでしょうか？



【大塚】 岩手大学も当初は、財務部施設管理課を中心に、まずデータを揃え、それに基づき環境報告書を作成していくことからスタートしました。具体的に環境報告書を作る会議も主催が財務部で、データを出しながら作って行きました。スタート時は受身的なものだったと思います。

藤井（克己）学長が、岩手大学で環境を前面に打ち出していったことが大きな転換点だったと思います。藤井学長は、環境の取組を私に一任されました。環境分野は自分の専門でもあり、岩手県の環境審議会など色々関わっていた経験からも、受け身ではダメで、能動的に行わないと生きてこないことが大きな考え方の根底にありました。また、大学は民間企業などと違い、学生の意識が大きく作用するだろう。これが環境マネジメント学生委員会の立ち上げにもつながります。

もう1つ、大学は非常に大きなフィールドです。例えば、当時は3億8,000万円くらい光熱・水道費がかかっていた。それが増えると圧迫されるのは研究費や学生支援経費が削られてきます。このような無駄はなるべく削減したい。きっかけになったのは、工学部でも省エネなど環境の取組を行っていた時に、夏休みでお盆休みにもかかわらず、水道料が減らなかったの、調査してもらったところ、工学部の本館で水漏れが見つかり、修繕してもらったら月に200万円の水道代が削減できた。当時、日本で一番水道使用量が多いのは東京大学の附属病院と言われていて、調べたら漏水があったことを聞いていました。もしかしたら岩手大学でも同じようなことがあるかも思っただけで調べた。このような調べるところから、環境の取組が動くことができました。

ただ、例えば暖房節減ばかりを行っているとギスギスした感じになり、本末転倒になるので、やはり環境意識を向上させていくことが必要になる。教員であれば教育や研究活動に関わる。ちょうど法人化のところで、職員にも、PDCA サイクルの意識をしっかりと持ってもらうのがよろしかろうということで、他大学よりちょっと違う動きを早めに始めました。

環境報告書の作成で、2・3年目ぐらいから環境マネジメント学生委員会にも入ってもらい、表紙のデザインなどに携わってもらいました。学生は4年間入れ替わります。本流が変わらないところで、学生の環境意識を高めていってもらい、大学で学んで社会に出てもらうことを行いたかったことがあります。

Q トップとしての藤井（克己）学長の考えが、岩手大学の環境マネジメントシステムを立ち上げるうえで大事な要素になっています。他に環境マネジメントに関係する教職員と学生が、互いに協力しあいながら環境の取組を行っていることが、現在も環境マネジメントシステム運営が続いている要因であると思います。このような取組を構築するうえでの工夫や当時心がけていたことはありますか？

【大塚】 多分事務的な動きは、事務職員が本職で行っていることなので動いていくと思っていました。やはり教員の環境意識と学生が主体的に環境への取組に参加できるかという組織づくり。組織として回っていくようになれば人が変わっても動くだろうということで、最初組織づくりを意識しました。学生は4年で新陳代謝していく中で継続していくにはシステムがしっかりしていないといけない。このようなところを心がけて環境マネジメントシステムを作りました。

Q 学生参画が現在でも岩手大学の環境マネジメントシステムで続けられている特色の1つであると思います。その点で、岩手大学環境マネジメント学生委員会の存在が重要になっています。岩手大学の環境マネジメントシステムに関する組織づくりで重要になる学生参画についてもお話しただけでした。岩手大学環境マネジメント学生委員会設立当時のお話をもう少しいただけますか？

【大塚】 どこかから学生を引っ張ってきたりしていました。環境マネジメント学生委員会の宣伝も行っていました。そのあたりはやっぱり学生は若くて一生懸命取り組む、手弁当で集まってくれる。さっき言った三木（敦朗）さんが、

学生と非常に積極的に関わってもらいました。

もう1つは場があったことかなと思います。環境マネジメント学生委員会室があるのとないのでは非常に違ったと思います。当時何人かの学生が絶えず来てくれて、学生委員会の規模が膨らんでいったところがあります。

学生は4年で終わりと言いましたが単発ではなくて、1年生が2年生に進級すると、次の年に1年生入ることで必ず重なる部分があります。その中で学生委員同士の連携が取れてきたのかな。入れ物・土台を作っておけば、その中で自然に花も咲き、木もできることだと思います。

中島（清隆）先生や赤谷（隆一）さんのように、ずっと環境マネジメントシステムの運営を続けてくれる人がいた。ここが変わってしまうと、正直組織体が続くことは厳しい。ずっと継続して関わる人がいるから成り立つ。これが事務職員で2・3年ごとに異動していたらうまくいってなかったでしょう。環境マネジメント学生委員会が10年も続いて来たのは、担当を続けていた力が大きいと思います。

Q 環境マネジメント学生委員会に所属した学生の成長についてお話しいただけますか？

【大塚】自分たちの考えだけではなく積極的に環境の取組で進んでいる他大学を見て、いいものを取り入れよう。千葉大学が一番進んでいましたので、千葉大学の先生も来てもらい懇意にしてもらい、私も視察に行きました。学生にも千葉大学や信州大学に視察に行ってもらいました。正に「百聞は一見に如かず」で彼らの意識がグンと上がったと思います。そのあとは各大学から岩手大学に来てもらうなどの交流をしてきました。色々なことを考えながら次のステップを踏んで、それが継続した力になっていると思います。

Q 岩手大学の環境マネジメントシステムの特色の1つとして、環境人材育成プログラムに象徴されるような教育活動への展開・反映があります。2000年（平成12年）に開講された環境教育科目で、環境を学べる機会を作っていこうというところが始まりました。それは、3年間で集中的に構築した環境人材育成プログラムに反映され、現在まで続いています。

環境マネジメントシステム運営を教育活動にどのように反映させるかということで、当時、お考えになられて実践されたことはありますか？

【大塚】当初はESDと環境教育のT字でした。T字よりもπの方がバランス的にもしっかりしているということでした。

学内資格「環境管理実務士」の認定や環境マネジメントシステム内部監査に学生が関わってもらい、単位認定を行うなど色々なことを行いました。学生による実践の場は大学内にもある。社会に出ると、環境問題は教育ではなく実践です。そのような意味で教育に実践を取り込んでいくπ字型の考え方がありました。教育という点では、玉（真之介）先生が非常に熱心に取り組みられていましたので、環境という側面から私は一緒に取り組んでいました。

外部評価の効果と影響：環境関連の受賞

Q 第1回エコ大学ランキング・総合第1位受賞が思いがけない出来事であったことをお話いただきました。岩手大学による環境マネジメントの取組は、信州大学・千葉大学・三重大学など他大学に先んじて取り組んでいたわけではなく、後発でありながらも、総合第1位を受賞されました。受賞の報告を受けて、どのような印象や感想を持たれましたか？

【大塚】 2009年（平成21年）6・7月に応募があって、取り寄せて赤谷（隆一）さんや伊藤（進）さんに言いました。応募要項を見たら、CO₂削減などの項目が多かった。そこは岩手大学で意識的に行っていたところでした。

個人的にはもっと目指したところがありました。岩手大学の一番の特色は演習林をかなり持っていることです。大学のキャンパスの面積で言うと日本で7番目になります。その演習林のCO₂吸収効果を活かさないか。その吸収量を企業などに買い取ってもらって、大学の法人化もあったので収入にならないかということもありました。

そのような意味で学内のCO₂排出量の現状把握とどのようにしたら削減できるかというところを少し早めに取り組んでいました。まさにエコ大学ランキングの応募書類の記載事項に重なるところがかなりありました。赤谷（隆一）さんに一番頑張ってもらって、きちんと回答できたのがかなり大きな要素だったと思います。

Q 大学外から環境マネジメントシステムなど環境への取組を評価されることが続ける原動力の1つになり得ると思われませんか？

【大塚】 第1回エコ大学ランキング総合第1位獲得は、大学内部の人たちへの意識づけになったと思います。全国放送で扱われて、いろんなところから視察に来られるようになった。環境マネジメント推進室だけではなくて、学部のレベルまで見学に来られたりしました。取り組んでいる人たちの意識は上がり、その効果は大きかったと思います。

そのような意味では非常にラッキーでした。今ひとつだったのは全学生、と教職員の意識。当然、なぜ環境マネジメントをするのだという人が、学部長レベルでもいました。その学部長が「岩手大学はエコ大学ランキング1位だから」というように変わったくらいですから、非常にラッキーで大きかった。環境マネジメントの基礎固めをするときに追い風が吹いてくれた。

ただずっと目標に掲げたISO14001認証取得に取り組んでいきたいと思いますというだけでは大変で、色々なところからもっと反対の声が出たかも知れません。岩手大学はエコ大学ランキング1位の大学だから、みんなで頑張っていてISO14001認証取得しましょうというように、非常に後押ししてくれました。それはありがたいことでした。

今後の岩手大学環境マネジメントシステム運営に向けて

Q 大塚先生が関わられた環境マネジメントシステムの組織・体制づくりや、環境マネジメントを教育活動にも反映させるような仕組みづくりが進められていく中で、第1回エコ大学ランキング総合第1位獲得という外部の評価がついてきた。この

時期に実施され、構築されたことが現在も続いている、その土台を作っていた。改めて 10 年という時間単位で岩手大学の環境マネジメントを見ると、このように振り返ることができそうです。

【大塚】最初は機関車が牽引するように牽引力で引っ張り出さないと動き出さない。そこから惰性ではなくて、次のエンジンが必要です。できれば各車両にエンジンがあったほうが良い訳ですから、そのような動き方にするのがこれからの 20 年・30 年につながっていくと思います。

Q 岩手大学の環境マネジメントシステム運営を続ける中で定着することが大事なことだと思う一方で、マンネリをどのように打破していくのかが、ずっと課題にはなっています。

【大塚】環境への意識は震災以降、世の中でも薄れていることもあり、時代の流れも大きな要因だと思います。私が入組んだ当時は、環境への取組に追い風が吹いていた時期と言えます。長く続けていくときには複層的に取り組まなければダメだと皆さんも変わっていきました。例えば、CSR(企業の社会的責任)について、大学外と連携しようという意識はありました。現在、残念ながら、このような全体的な意識がちょっと落ちているのが厳しいところかと思っています。だからこそ大学が取り組まなければならないのかもしれませんが、よく「継続は力なり」と言います。継続すると力がつくのではなくて、力がないと継続できない。その力をどこで生み出していくかは、牽引する人がその時々でいないといけない。創業者がいつまでも取り組めるわけではない。2代目・3代目となってくる。その意味では、学長などが環境に取り組む姿勢をもう 1 回きちんと打ち出してもらいたいと思います。

Q 先ほどの演習林を活用した CO₂ 吸収源のお話も、環境への取組を大学と企業で連携して進める一環として考えておられたことでしょうか？

【大塚】大学のイメージ戦略も考えていました。当時、森林吸収に取り組んでいる企業が大学と一緒に連携しているのは大学にとっても非常にプラスになるのではないかと。色々な企業と連携できれば、研究活動にもつなげられるのではないかと。それは果たせず終わってしまいました。

どうしても環境というと、大学にとってブレーキになると思う人もいます。光熱水費を削減すると研究ができなくなるのではないかと。でも、企業との連携で、研究費などの導入ができれば、結局大学の力になるので、そのようなところまで発展させたかったというのが本当のところだと思います。世の中もそのようなようになっていきそうではあったけれど、震災など大きな出来事がありましたので、なんとも仕方ないです。

Q 改めてこのように振り返ってみると、環境マネジメントシステム運営を含めた環境への取組について、岩手大学ではわりと成功しているのではないのでしょうか？

【大塚】環境の取組は、いわゆる経費削減だけでは、みんなから煙たがられる。賞を獲ろうと狙ってするものでは決してない。そのような姿勢は絶対誰からも支持されない。第 1 回エコ大学ランキング総合第 1 位獲得は、そういう意味

では良かった。環境関連の賞があれば意識して応募して行きましょうと、当時、赤谷（隆一）さんなどと一緒に取り組みました。それは結果として良かったと思います。ちょうど岩手大学前身学校の出身である宮沢賢治が非常に注目されたとき、彼の考え方がその時代に合っていたなど色々な要素が本当うまくその時期に集中していました。

ただ、今はなかなか社会が認めてくる状況ではない。やがてそのような時代が来れば、そこまで、岩手大学としても頑張っていければ。

岩手大学環境マネジメント学生委員会への期待

【大塚】学生の意識をきちんと持ってもらえるような取組を大学内部でしっかりしていただきたいと思います。今、環境マネジメント学生委員会の学生数や活動はどうでしょうか。

【中島】100名を超えています。実働は3割くらいですが。

【大塚】彼らの意識はどうですか。すでに決まったことがあるから行っている惰性で動いていますか。それとも新しいことに取り組みたいか。

【赤谷】惰性で動いて、やらされ感がある活動と、自分たちで取り組みたいと言っている活動があります。やらされ感があることについては、自分たちで考えながらしたいことに取り組みでいきたいという話はしています。2018年（平成30年）2月には、学生と一緒に大阪大学に行ってきました。

【大塚】「百聞は一見に如かず」。やっぱり見るのが一番。だけど見ただけではダメで、「百見は一考に如かず」。見てきたら考えなければならない。今度は「百考は一行に如かず」。行動を起こさなければダメ。行動を起こしてその結果がどうなるかは、環境への取組に関してはそんなに問わなくてもいいのかもしれない。何かの賞を獲れたこと、あるいは劇的に何かを削減できたことでなくてもいいけれど、その行動を起こしてくれるところまで意識を持って考えて取り組んでくれればいい。予算も厳しくなるかもしれませんが、学生が取り組みたいことに取り組みめるように頑張ってもらいたい。

Q 学部を含めた改組があって、環境マネジメント委員会では、人文社会科学部の環境科学課程所属学生の割合が大きかった。改組で所属学生数が減るかなと思っていましたが、100名を超えるくらいで推移しています。

実働になると3割。三重大学や千葉大学もそのくらいようです。その中で熱心に取り組んでいる学生が何人かいる。環境マネジメント学生委員会を10年前に立ち上げた当初の10数名くらいでした。学生は変わりながらも、熱心に取り組む割合としては、3割くらいと見ています。

改組で環境科学課程がなくなり、「環境」の名前がついている学科・課程で1・2つくらいが残されているくらい。プログラム・コースベースでは残っているところもありますが、普通そこは見られず、見ても学科・課程くらいなので。

その中で、環境マネジメント学生委員会の所属学生数が思ったよりも大きく減ることはここ2年ではなかった。しかし、学生の環境意識をみると、もしかしたら離れている、減っているところはあるのかなと見ています。

【大塚】 募集する単位で冠に「環境」がついているところにくる学生とそうでない学生では、環境意識に差があるのはしょうがないところがあります。

一番良い姿は環境と意識しなくて、普通に暮らしていれば環境にちゃんとやさしい取組になっていること。全体の意識水準が上がるのが一番。そこに行くまでには環境意識の強い人たちが牽引していかなくてはいけないというのも事実なので。

Q ブラジル・リオデジャネイロで2012年（平成24年）に地球サミット（国連持続可能な開発会議：リオ+20）が開催されたときに、環境マネジメント学生委員会から誰か行かせましょうとなりましたが、その時は実現しなかった。

その後、韓国や中国での学生発表の募集がきて、環境マネジメント学生委員会に募集をかけると、今年度は日本の京都でしたが、3年連続参加する学生がいました。韓国や中国へ行って、英語で発表する。当時できなかったことに取り組む学生さんも現れてきています。ただ、全体で見ると本当に一部の動きです。

【大塚】 一部でもそのような学生がいれば、1つの牽引力にもなる。取り組んでいる人はしんどいかもしれないけど、色々なところにアンテナを張りながら、どんどん取り入れることで、学生の意識も上げていってあげないと、マンネリ化して同じことに取り組むことになってしまう。

岩手大学の持続可能性（サステナビリティ）への取組

Q 大学がいかにか今後も続いていくか、あるいは、岩手大学が拠点とする岩手県などの地域がいかにか続くかという、持続可能性・サステナビリティとして大きく見ると、環境も1つの分野と捉えられます。持続可能性・サステナビリティは環境だけではなくて、震災復興・男女共同参画・国際交流も関わります。当時のESDは複数の分野をつなぐような取組を目指されていたと思います。しかし、現在、岩手大学ではつながっていない。岩手大学キャンパスの持続可能性、あるいは岩手県の持続可能性に貢献できるような全学的な取組はなかなか難しいような状況にあるのか。個々で一生懸命に取り組んでいるが、それぞれ縦割りとまでは行かなくても、大学全体でアピールするところまでは行っていない難しさもありそうです。

【大塚】 大学の時期を考えると、2004年（平成16年）の国立大学法人化以上の大きな変革が間もなく起こってきます。国立大学法人の統廃合などがこれから始まってきますので、それどころではないと、大学内ではなると思います。だからこそ、逆にきちんと岩手大学の芯の部分は環境などで、アイデンティティ・あり方を示すところまで保っている方が実際は良いと思います。国立大学法人の統合だけではなくて、国公立大学を超えた枠組みでの改変も当然考えられます。そうなると当然岩手県の単位で組んでいく時に、1つの共通項として生きてくることもあるかもしれません。

岩手大学環境方針制定 2006（平成18）年1月

環境方針は、組織の環境マネジメントシステムだけでなく、環境問題への取組の基礎となるべき指針です。

岩手大学環境方針は、2006年1月26日に制定・公布。国立大学法人岩手大学『環境報告書2006』（3ページ）には、当時の平山健一学長名で環境方針が掲載されています。その後、環境マネジメントシステム規格の要求や審査結果、状況の変化などにあわせて、微修正を行い、下記の改正版に至っています。



岩手大学環境方針

〈基本理念〉

岩手大学は、地球環境の保全・再生が21世紀の最重要課題の1つであると認識し、環境意識の高い人材の育成をはじめ、環境保全・再生に向けた教育・研究を積極的に推進し、持続可能な社会の実現に貢献します。またその一環として、岩手大学内の活動のすべてにおいて、大学・附属学校構成員及び常駐する大学関係者が一致協力して環境に配慮し、大学の社会的責任として環境負荷の軽減と環境汚染の予防やキャンパス環境の改善に努めます。

〈基本方針〉

岩手大学は、基本理念を実現するために、中期計画を踏まえ以下の活動に積極的に取り組みます。

- 1 環境保全・再生に係わる教育・研究を意欲的に展開し、社会が求める環境意識の高い人材を養成します。
- 2 環境に係わる教育・研究の成果を踏まえ、地域社会を含むあらゆる人々に対する教育、啓発、普及活動などに取り組みます。
- 3 地域のNPOや行政等と連携して、地域の環境保全・再生の取組、生物多様性の保全に積極的に関与します。
- 4 環境に関連する法令及び岩手大学が同意する環境に関する要求事項を順守するとともに、環境マネジメントシステムによってキャンパス環境の継続的改善を図ります。
- 5 本方針を踏まえた目的に基づき、毎年目標を定め、省エネルギー・省資源、廃棄物削減、再資源化、グリーン購入などに積極的に取り組みます。
- 6 環境方針をすべての構成員に周知し、実行するとともに、その結果を広く一般にも文書及びインターネットで公開します。

2006年1月26日制定

2017年3月24日改定

岩手大学長 岩瀨 明

国立大学法人岩手大学『環境報告書2018』2ページより抜粋。

岩手大学環境マネジメント推進本部設置 2006（平成18）年7月

岩手大学環境マネジメント推進室設置 2008（平成20）年10月

岩手大学では、2005年度に学長を最高環境責任者とする環境管理システム組織を立ち上げ、2006年度にはその組織の整備・充実を行いました。

岩手大学の環境マネジメントに関する重要事項を審議する機関として、環境マネジメント推進本部（2013年4月：環境マネジメント推進委員会へ変更）を設置。学部単位を中心としたユニットに対して、環境方針や環境目標等を示すとともに、改善などを勧告・指導・助言を行う体制としました。

2008年度には、環境マネジメントシステム規格（ISO14001）の認証取得を目指して環境企画専門部会を拡充、環境マネジメント推進室を設置しました。また、学生が本学の環境マネジメント活動に主体的に参画する岩手大学環境マネジメント学生委員会が発足し、学生と大学の教職員が協力して行う環境保全活動を開始しました。

国立大学法人岩手大学『環境マネジメントマニュアル第10版』。

部局	環境責任者	環境委員会	ユニット責任者	実行担当者	管理対象 (施設建物等)	教育研究施設
人文社会科学部	学部長	環境管理システム委員会	評議員	兼務教員 副事務長	人文社会科学部	
教育学部	学部長	環境管理委員会	副学部長	兼務教員 副事務長	教育学部	平泉文化研究センター
加賀野キャンパス・東安産キャンパス 幼稚園 小学校 中学校 特別支援学校	教育学部長		副園長 副校長 副校長 副校長	総括： 附属小学校副事務長 主任 副事務長 主査		
理工学部	学部長	環境管理委員会	評議員	兼務教員 副事務長	理工学部	地域防災研究センター ものづくり技術研究センター
農学部	学部長	環境管理委員会	副学部長	兼務教員 副事務長	農学部	
通大研究科	通大研究科長			副事務長		
農学部附属 FSC (2019) 御明神演習林 御明神牧場 滝沢農場 滝沢演習林						
釜石 キャンパス (2019)					釜石キャンパス	三陸水産研究センター
事務局	事務局長	環境管理連絡会 ユニット責任者と 実行担当者で構成	施設管理課長	総括： 施設管理課副課長 1課3重代表担当副課長 2課1重代表担当副課長 学術研究推進部代表 担当副課長 3重代表副課長 財務部代表 担当副課長 入試課副課長	2F南執務室 3F南執務室 1F南執務室 2F北・3F北執務室 1F南執務室 1F北執務室	
事務局 (学生センター)	学務部長	環境管理連絡会 ユニット責任者と 実行担当者で構成	学務企画課長	総括： 学務企画課副課長 副課長 副課長 副課長 主査 副課長	学生 センター	
地域連携推進部(地連センター・コラボミュー)	地域連携推進部長		地域連携・COC推進課長	主査	地連 センター・コラボ ミュー	
情報基盤 センター	センター長		学術情報課長	副課長又は センター職員	情報基盤 センター	
RI総合実験センター	センター長		研究推進課長	センター職員	RI総合実験センター	
図書館	図書館長		学術情報課長	副課長	図書館	
岩手大学 生協	理事長		専務理事	生協環境責任者	岩手大学 生協	

環境報告書 2006 公表 2006（平成 18）年 9 月

2004 年 6 月に「環境情報の提供の促進等による特定事業者等の環境に配慮した事業活動の促進に関する法律（環境配慮促進法）」制定。国立大学法人である岩手大学にも、毎事業年度、環境報告書を作成、公表することが求められています。

2006 年 9 月に、最初の環境報告書（国立大学法人岩手大学『環境報告書 2006』）を作成、公表しました。

2009 年度からは、岩手大学環境マネジメント学生委員会（特に環境教育チーム）が、環境報告書の表紙作成・キャンパスマップの作成（『環境報告書 2011～2015』）、前年度のトピックスの記事執筆、学部・研究科の環境教育・研究事例代表者インタビューと記事の執筆、環境マネジメント学生委員会の取組および外部との環境コミュニケーションの記事執筆など、環境報告書の編集に多く関わるようになっていきます。



環境マネジメントシステム規格 ISO14001 認証取得キックオフ宣言 2008（平成 20）年 6 月

2008 年 6 月 27 日に、藤井克己学長（当時）が ISO14001 認証取得に向けて“キックオフ宣言”を行いました。これは、2010（平成 22）年度に ISO14001 認証取得を目指すに当たり、“キックオフ宣言”を「岩手大学 ESD 推進週間」に行うことによって、認証取得に向けた取り組みを教職員並びに学生に周知することを目的としたものです。キックオフ宣言に引き続き、次のイベントが行われました。



（1）ISO14001 認証取得の概要説明

環境マネジメントシステム認証取得推進室長（ISO 推進室長）の大塚尚寛副学長（環境・情報統括管理担当：当時）より、認証取得の目的、認証登録によるメリット、認証取得の範囲（サイト・組織）、認証／登録取得の時期（年月）、推進プロジェクト組織、推進計画（日程スケジュール）等について説明がありました。

（2）「環境報告書 2008」の表紙デザイン採択者への学長表彰

『環境報告書 2008』表紙デザイン公募に応募して採択された人文社会科学部国際文化課程 4 年生（当時）の菅原裕佳さんに、藤井学長より表彰状と副賞（図書券）が贈呈されました。受賞後に、菅原さんより今回のイラストは、表紙デザイン

公募のテーマである持続可能な未来、大地と人との共存をイメージして描いたとのコンセプトが披露されました。

(3) パネルディスカッション “ISO14001 認証取得に向けて”
認証取得に向けての課題として、①環境マネジメントシステム (PDCA) を浸透させるためには? ②学生の主体的参加をどのようにして促すか? をテーマに、パネリストと会場との活発なディスカッションが行われました。

【パネリスト】ESD 学生ネットワークのメンバー4名 (各学部1名)・

環境マネジメントシステム認証取得推進室員4名

【コーディネータ】大塚尚寛 (ISO 推進室長: 当時)

国立大学法人岩手大学『環境報告書 2009』15 ページを修正。

岩手大学環境マネジメント学生委員会発足 2008 (平成 20) 年 10 月

岩手大学環境マネジメント学生委員会 (通称「EMS 学生委員会」) は、岩手大学の環境方針に従い、ISO14001 認証取得に向けた環境マネジメントの構築と運用に、学生が準構成員として主体的に参画することを目的とし、大学側と協力してその責務を果たし活動していくため、2008 年 10 月 1 日に設立されました。ISO14001 取得後も、岩手大学が更なる持続可能な発展をしていくために活動に取り組んでいきます。

私たち学生委員会のメンバーは、岩手大学の環境マネジメントシステムの中での PDCA サイクルに基づいて活動しています。そのサイクルを浸透させるため、定例会を開き、活動の話し合いをし、報告や見直し、それに基づき改善を行ってきました。

委員会の活動を進めるに当たり、より具体的に、かつ効率のよい活動をするために班を編成しました。現在、委員のメンバーを、省エネ・省資源班、廃棄物班、企画班、広報班の 4 つの班にわけて活動しています。班での取組は活動の計画を主とし、実際に計画を実行するのは委員全体で行うことにしています。2008 年度の具体的な活動は以下の通りです。●学内環境調査 (ゴミ調査) ●全国学生環境セミナーへの参加 ●千葉大学視察 ●環境マネジメントシステムについてのパンフレ



ットや DVD の作成 ●内部監査委員養成講座等、各種講座への参加広報活動 ●環境マネジメント推進室会議への出席など、以上のような活動を行ってきました。

今後は、これまでの活動のほかにもたくさんの方の活動を計画しています。例えば、自分達で勉強会を開き、環境や EMS などに対する知識や考えをお互いに深めようと考えています。また、学内環境の内部監査へ補助員として参加することも予定しています。

私たち EMS 学生委員会は発足してから日が浅いので、知識や活動内容を十分に深めながら 委員会の基盤を作り上げることに専念し、委員会としての体制を確立させていきたいと考えています。

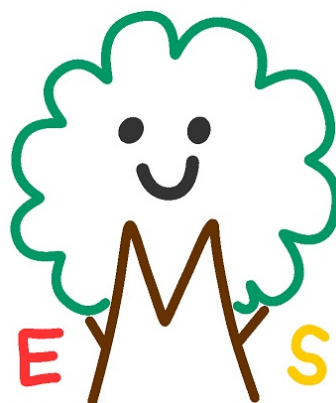
EMS マーク（現：モリーちゃん・岩手大学環境マネジメント学生委員会シンボルキャラクター）

「EMS」という略語と“自然”を象徴する樹木を組み合わせたデザインです。本学の EMS がより身近なものになるように、ポスターやホームページなど様々な場面で使用していきたいと考えています。

岩手大学『岩手大学環境報告書 2009』17 ページ「4. 2008 年度トピックス 環境マネジメント学生委員会発足」（高橋幸・EMS 学生委員会委員長執筆：当時）を修正。

2008 年 10 月に、有志 14 名で設立された岩手大学環境マネジメント学生委員会は、11 代目の委員長・執行部の下、10 年目を迎えました。ここ最近では、100 名を超える学生委員が在籍。チーム（班）も、上記の省エネ・省資源、廃棄物、企画、広報（現：広報 web チーム）の 4 つから、環境教育、グリーンキャンパスの 2 つを加えた 6 つのチームが、上記の活動で続けているものもありつつ、新しい活動も行っています。

また、6 つのチーム活動だけでなく、全国の大学生が集まった「環境マネジメント全国学生大会」の運営（2017 年）、当委員会も会員になっている「CAS-Net Japan（サステイナブルキャンパス推進協議会）」などが主催する「サステイナブルキャンパス・アジア国際会議（ACCS：Asian Conference of Campus Sustainability）」に 2015 年から 3 年連続で 6 名が参加（第 1 回：韓国、第 2 回：中国、第 3 回：日本・京都）。当委員会の活動を発表した結果、2 年連続で受賞するなど、岩手大学内のエコキャンパス・サステイナブルキャンパスや周辺地域での活動にとどまらず、全国・海外での活動も展開しています。



EMS 公開セミナー

EMS 公開セミナーは、岩手大学 EMS における環境教育研修に加え、市民公開講座として、全学共通教育総合科目「岩手大学の環境マネジメント」(現：教養科目地域科目「環境マネジメントと岩手大学」)講義時間帯に下記のとおり開催してきました。

年度	講演者など	講演タイトルなど
平成 20 (2008)	倉阪秀史先生 (千葉大学法経学部教授) 大塚尚寛先生(岩手大学副学長(環境・ 情報統括管理担当))	環境保全型の大学をつくる ー環境マネジメントシステ ムの実践
平成 21 (2009)	深沢利元先生(横浜市立大学 CSR センター副センター長) 藤原英文氏(岩手大学環境マネジメン ト学生委員会委員長)	EMS 導入のポイント EMS 学生委員会の活動報告
平成 22 (2010)	【講演】山本武先生 (NPO 法人 E-Being 主席研究員) 【パネリスト】山本先生 藤井克己先生(岩手大学学長・最高 環境責任者) 大塚尚寛先生(岩手大学理事・副学長、 環境管理責任者) 玉真之介先生(岩手大学理事・副学長、 大学教育総合センター長) 西郷優氏(岩手大学環境マネジメント 学生委員会委員長)	EMS の継続的改善
平成 23 (2011)	「がんちゃん国際フォーラム」と共催 【講演】堀江正彦先生 (特命全権大使(地球環境問題担当)) (前駐マレーシア特命全権大使) 【トークセッション】堀江先生 鷹屋敷ありさ氏(岩手大学環境マネジ メント学生委員会) フィルダウス氏(マレーシア留学生・ 電気電子・情報システム工学科 3年)	グローバル化のなかの国際 理解「多文化国家マレーシア そして気候変動問題 (COP17)」
平成 24 (2012)	奥山哲也先生(オフィスオクヤマ代 表・三重大学環境管理推進センター アドバイザー)	カーボンフリー大学と スマートキャンパスの活動
平成 25 (2013)	國部克彦先生 (神戸大学大学院経営学研究科教授)	環境マネジメントと環境報 告：企業と大学の視点から
平成 26 (2014)	【講話】根本俊英先生 (盛岡市環境部次長) 【パネリスト】根本次長	大学のごみ～紙・プラスチック 製容器包装の分別回収を 中心に

	井上博夫教授・笹尾俊明准教授 (岩手大学人文社会科学部) 小野慎悟氏(岩手大学環境マネジメント学生委員会)	
平成 27 (2015)	森下研先生(一般財団法人持続性推進機構専務理事・エコアクション 21 中央事務局・環境人材育成コンソーシアム(Ecolead) 幹事)	エコアクション 21 と環境人材育成～21 世紀の経済社会を担う人材～
平成 28 (2016)	安井至先生(一般財団法人持続性推進機構理事長)	未来志向の環境マネジメント 時の流れとリスクとイノベーションを軸とした把握
平成 29 (2017)	野澤日出夫先生(認定 NPO 法人環境パートナーシップいわて代表理事)	心地よく豊かに生き延びるために～環境マネジメントの観点を交えて
平成 30 (2018)	成田雄氣先生(岩手県環境生活部環境生活企画室主査)	いわての環境政策～みんなの力で次代へ引き継ぐ いわての「ゆたかさ」～

岩手大学環境人材育成プログラムの構築・継続 2009 (平成 21) 年 4 月～ 岩手大学環境人材育成プログラム認定資格「岩手大学環境管理実務士」授与式 2012 (平成 24) 年 3 月～



岩手大学では、2009 年度から、平成 21 年度環境省「環境人材育成のための大学教育プログラム開発」採択事業「ISO14001 と産学官民連携を活用した『π 字型』環境人材育成プログラム」(現:「環境マネジメントと産学官民連携を活用した『π 字型』環境人材育成プログラム」)を進め、2011 年度にプログラム開発が終了しました。

岩手大学環境人材育成プログラムは、ESD の価値観（縦軸と横軸の要の部分）に基づき、基礎的な環境力（横軸）と4つの学部（人文社会科学・教育学・（理）工学・農学）の専門性（縦軸1）に加え、環境マネジメント・環境報告書に関する実践的な環境力（縦軸2）を備えた「 π 字型」環境人材を育成するものです。所定の要件を満たした学部生には、「 π 字型」環境人材の証として、岩手大学認定資格「環境管理実務士」が授与されます。

「環境管理実務士」の授与要件は、1) ESD の価値観を養成する ESD 科目の単位取得（4 単位以上）、2) 基礎的環境力を育成する環境教育科目の単位取得（2 単位）、3) 実践的環境力を育成する環境マネジメント科目の単位取得（4 単位以上）に加えて、4) 地域に貢献する学外実習の体験を踏まえ、環境マネジメントの観点から作成、提出した提言書の承認、です。特に、環境マネジメント科目のうち、「環境マネジメント実践演習」（現：地域環境マネジメント実践演習。人文社会科学部専門科目）と地域貢献の学外実習では、参加者が、岩手地域を「学びのフィールド」として、岩手県中小企業家同友会加盟企業、岩手県の環境学習交流センター、盛岡市役所等を数回にわたって訪問し、岩手大学で培った ESD の価値観・基礎的、実践的環境力を体験的に習得することができます。

国立大学法人岩手大学『環境報告書 2012』10 ページ

「3. 2011 年度トピックス 環境管理実務士の認定」を修正。

岩手大学環境人材育成プログラムは、所定の要件を満たした岩手大学学部生に、岩手大学長から、「 π 字型」環境人材の証として、岩手大学認定資格「岩手大学環境管理実務士」認定証を授与しています。

平成 21 年度環境省「環境人材育成のための大学教育プログラム開発」採択事業「ISO14001 と産学官民連携を活用した「 π 字型」環境人材育成プログラム」(2017 年度から「環境マネジメントと産学官民連携を活用した「 π 字型」環境人材育成プログラム」に名称変更。)として開発開始。平成 24 年度からは岩手大学によるプログラムとして継続。平成 23 年度から、同プログラムのゴールである岩手大学認定資格「岩手大学環境管理実務士」授与者は計 21 名となりました。

岩手大学ニュース 2017 年 3 月

「岩手大学環境人材育成プログラム平成 28 年度岩手大学認定資格「岩手大学環境管理実務士」認定証授与式を挙行了しました。掲載（更新）日時：2017-03-17 16:00:00」を加筆修正。



2009 年度環境マネジメントシステム内部監査 2009（平成 21）年 6・7 月

岩手大学の各部局・ユニットにおいて、環境マネジメントシステム上の計画された取り決め事項に適合しているかどうか、また、それらが適切に実施されているかどうかを点検するために、2008 年度を監査対象期間とする定期監査を 2009 年 6 月 30 日から 7 月 9 日までの間に 4 学部及び財務部を監査対象部局として実施しました。

内部監査の実施に当たっては、教職員による内部監査員 2 名及び学生による内部監査補助員若干名とする内部監査班を 5 班編成し、監査時間は学生の授業時間に合わせて約 90 分としました。監査対象部局では、ユニット責任者、環境実行担当者及び構成員が対応しました。

内部監査の結果、指摘事項の多くが軽微な改善事項でした。特徴としては、チェック体制の未整備が見られました。たとえば、全学レベルでの環境側面の監視結果が各ユニットにフィードバックされていない例や、環境マネジメント教育の実施状況の把握方法が未確定なユニットが多かった点です。各ユニットにそれらの指摘事項をフィードバックして改善を図り、2010 年度の ISO14001 認証取得に向け、より良いシステムを作り上げていきたいと考えています。

内部監査に先立ち、2008 年度には、各部局から推薦のあった内部監査員候補者に環境マネジメントマニュアルを配付し、内部監査手順及び内部監査規則等の説明を行いました。また、学生教育の観点から、環境マネジメント学生委員会及び関心のある学生の中から希望者を募り、内部監査補助員候補者としてしました。これらの候補者を対象に平成 21 年 4 月に内部監査員養成講座を開講しました。最終試験に合格した教職員 18 名、学生 15 名の計 33 名に内部監査員及び内部監査補助員の資格を付与し、内部監査員及び内部監査補助員として登録しました。今回の内部監査は、この中から 10 名の内部監査員を委嘱し、15 名の内部監査補助員とともに実施したものです。

国立大学法人岩手大学『環境報告書 2009』46 ページ

「12.環境マネジメントシステムの見直し 内部監査の実施」

梶原昌五・教育学部准教授（内部監査責任者・内部監査委員会委員長：当時）執筆を修正。

岩手大学の環境マネジメントシステム（EMS）内部監査は、ISO14001 からエコアクション 21 への EMS 規格を変更しても続けられています。全学共通教育（現：教養教育）総合科目（現：地域科目）「環境マネジメント実践学」内で、内部監査（補助）員養成研修と内部監査の準備・実施・結果報告が行われています。2018 年度まで、内部監査員（教職員）151 名、内部監査補助員（所定の要件を満たした学部生）81 名が内部（補助）監査員養成を修了。内部監査を経験しています。



第1回エコ大学ランキング総合第1位受賞 2009（平成21）年9月

岩手大学は、2009年9月にエコ・リーグ（全国青年環境連盟）を中心とした Campus Climate Challenge 実行委員会が主催した第1回『エコ大学ランキング』において、総合1位を獲得しました。

エコ・リーグは、1994年に発足した環境NGOで、地球規模から地域までの環境問題の解決を目指す青年の活動が、連携し、互いに発展、活性化しあう共通の場を創ることを通じて地球環境問題を解決することを目的としています。

このランキングは、2009年5～7月にかけて、国立大学84校、公立大学74校、の環境対策担当者に、各大学の温室効果ガス削減の取り組みに関する調査を実施し、項目ごとに点数を設定し採点したものです。調査内容は「二酸化炭素排出量・エネルギー使用量削減」「実施している地球温暖化対策」「学生への教育・啓発」の3部門です。岩手大学は「実施している地球温暖化対策」「学生への教育・啓発」の部門で1位を獲得しました。また、その他の「大学独自の取り組み」部門でも1位を獲得し、見事総合1位に輝きました。



受賞の要因として、(i) 学生と大学を繋ぐ組織である環境マネジメント学生委員会の設置、(ii) 充実した環境教育科目の実施、自然エネルギーの導入、自主参加型国内排出量取引制度への参加などのソフト・ハード両面の地球温暖化対策を数多く実施しているとともに、多くのCO₂削減を達成したことが挙げられます。

岩手大学『岩手大学環境報告書2010』8ページ

「3. 2009年度トピックス エコ大学ランキング総合1位受賞」

（藤原英文・EMS学生委員会委員長執筆：当時）を修正

環境マネジメントシステム国際規格 ISO14001 認証取得 2010（平成22）年11月

2010年9・10月に、審査登録機関である財団法人日本品質保証機構（JQA）による登録審査を受審しました。

認証取得の範囲（サイト・組織）は上田キャンパス（放送大学岩手学習センター・岩手大学生協同組合を含む）を対象に、ファーストステージ審査及びセカンドステージの2度にわたる審査を受審しました。

審査の結果、1件の改善指摘（カテゴリーB）を受けましたが、本学の環境マネジメントシステムの有効性は認められ、2010年11月12日に認証登録されました。

岩手大学『岩手大学環境報告書2011』8ページを修正。



第2・4代・環境マネジメント推進室長 小川智先生 インタビュー

環境マネジメント推進室長任期：
2011年（平成23年）7月
～2014年（平成26年）3月
2015年（平成27年）3月
～2019年（平成30年）3月

聞き手

中島清隆（環境マネジメント推進室
副室長）

赤谷隆一（環境マネジメント推進室員
／技術部技術室長）

インタビュー日時：

2018年（平成30年）12月5日



岩手大学環境マネジメントシステム運営への関わり

Q 岩手大学の環境マネジメントシステム（EMS）への関わりについて時系列的にお伺いいたします。

大塚（尚寛）先生の後を引き継ぎ、環境マネジメント推進室長に就任されました。就任されてから最初の1年ぐらい、環境マネジメントシステムの運用を始め、環境配慮活動や環境マネジメント学生委員会との協働についてお伺いいたします。

【小川】 理事に就任して、それまでの経緯はほぼ全くわからない状態で担当するわけです。経営側の責任があります。中身を知りながらなおかつ EMS の PDCA（Plan 計画-Do 実施-Check 確認-Act 見直し）サイクルを回すための新しい施策などを企画立案していかなければいけない立場になります。

活動の中身を知るために、環境マネジメント推進室会議と環境マネジメント推進委員会、それから環境マネジメント学生委員会（EMS 学生委員会）の活動に関する過去の資料に一応全部目を通して、推進室会議や推進委員会の事前準備に少し時間を使って円滑に運営、進行できるように心がけたことがまず大きいところ。EMS 学生委員会との関係においては、学生が企画するすべてのイベントに必ず参加する。学生たちが一体どのように活動しているのかを知らないと、この後こういった形でサポートできるかもわからないので。追いコン（追い出しコンパ）などの飲み会にもほぼ全部出る。OB 会まで出ました。

このように、まず環境配慮活動が岩手大学の中でどのような形で PDCA サイクルを回しているのか、あるいは構成員がどういう意識で活動に取り組んでいるのか、ということをもまず把握するところから始めたのが1年目、2011年7月から2012年3月まで。

実際には ISO14001 に基づく EMS が動いています。しかも 2010 年

10月にISO14001を認証取得して、2011年4月からのPDCAサイクルが回り始めたところだから、まず大塚先生からバトンを受け取った2011年度のEMSを的確に運営させなければいけないところもありました。推進室事務局と一緒に、色々なことを教えてもらいながら実際には活動していたのが最初の1年くらいになります。2年目になるとちょっと意識が変わってきました。

- Q 2010年11月にISO14001を認証取得したことで、大塚先生がある程度岩手大学のEMSを確立された。小川先生が環境マネジメント推進室長に就任されて、約1年かけてEMSの運営に慣れられた後、EMSの運営上、状況などに合わせてEMSの組織や活動を変えることを徐々に進めて来られました。1年目にEMSを理解された後のことについて印象に残っていることがありますか。

【小川】 活動の全貌が大体掴めてきたところから、ISO14001認証取得後、どのようにしていくべきなのかを考えることになるわけです。

一構成員から環境マネジメント推進室全体を運営する立場にいきなり変わりました。構成員が環境配慮活動やEMSにどのように寄与しているか、あるいは、どのような考え方で環境マネジメントの活動を見ているのか、ある程度知りたかった。色々な方に話を聞いてみると、「本部で行っている特定事業推進室の活動」という印象を持っている方が非常に多かった。

構成員に周知するためのもっとも良い特効薬は、外部から評価されることです。ISO14001認証取得は外部からの非常に高い評価だけど、それだけだと構成員にはよくわからないので、色々な環境配慮活動への栄誉をもらうように、対外的に申請して受賞に結びつけていきたいと思ったのがその後です。岩手大学の環境配慮活動の成果が外部から高く評価されることになれば、構成員におのずと周知される。「せっかく頑張っているのだから何か賞を獲りに行こうよ」というような形で、2年目の活動はスタートしました。

当時の最高環境責任者・藤井（克己）学長は大変環境に対する理解・造詣が深かったので、このような活動には非常に積極的に尽力、協力してくれたところもあります。受賞に向けた積極的な活動をしていくことにあまり学内的なハードルはなかったので、環境配慮活動を中心に進めてきたというのが一番。学生委員会の活動が思っていたよりもしっかりと行われていて、学生たちが確実に育っているのがわかったので、教職員を中心とする環境配慮活動に加え、学生への環境教育にしっかりとサポートをしていかなければいけないということを環境マネジメント推進室長2年目になって具体化して考えるようになりました。

- Q 環境関連各賞の受賞、対外的、社会的評価のお話をもう少しお伺いしていきます。大塚先生時代にも、「エコ大学ランキング」2009年度総合第1位獲得がありました。その後、小川推進室長の時代に環境関連の受賞が立て続けに続きました。その中でも、2013年4月、フジサンケイグループ主催「地球環境大賞」文部科学大臣賞受賞が一番大きかった。

岩手大学のEMSが学内の認知度を高めるための一環として、対外的、社会的評価を高めていった時期でした。各賞の受賞に対して、どのような認識をお持ちでしたか。

【小川】 環境関連の受賞が構成員のモチベーションになる面では、仕掛けたことが成功に結びついたと思っています。当初は教職員の業務量が増える。学生でも課外の活動になる。忙しい状況の中で、不平・不満が少なからず出てくる、特にマンネリ化していけば。そのような中でのカンフル剤として、外部での高い評価は、構成員が環境配慮活動へ参加する、あるいは、参加を続ける一つのモチベーション、あるいは、やむを得なさにも確実に繋がったと思っています。

エコ大学ランキング総合第1位を一回きりではなくて、継続して獲ることに意味があると考えました。私の担当になってからも、常に1位を獲るのは確かに難しいことなので、常に上位を張るような目標で応募し続けてきました。ちょっとでも気を抜くと、スッと順位は落ちる。それは次への環境配慮活動に反映させればいい。そのような面ではエコ大学ランキングは、我々のPDCAの指標にはなったと思っています。

数年にわたるエコ大学ランキングでの実績やその他の県内・県外の色々な実績が少しずつ評価されるようになってきた時期に、フジサンケイグループ主催の地球環境大賞に応募した結果、文部科学大臣賞をいただきました。全学が環境配慮活動やEMSの重要性について着目あるいは再認識していただける大きな受賞につながったと思っています。むろんその後も継続して、各章に申請している大きな理由は、別に賞を獲るために活動しているわけではなく、やりがいや構成員に生まれるような。あるいは、どこかで「岩手大学は、このような賞を受賞されていますよね」という話を聞けば決して嫌な思いはしないわけで。継続した環境配慮への取組が構成員全体に広がり、維持できればいいところにはつながったと思います。

Q 他には、環境コミュニケーション大賞の環境配慮促進法特定事業者賞を2年連続で受賞しました。岩手大学は国立大学法人であることから、環境報告書の作成・公表が法律で義務づけられています。この受賞で、岩手大学の環境報告書が対外的、社会的に評価されました。長年応募し続けていてなかなか獲れなかった賞でもありました。

岩手大学の環境報告書には、環境マネジメント推進室長の立場で関わっていただいています。岩手大学の環境報告書が対外的、社会的評価を高められたところも鑑みて、どのような認識・印象をお持ちでしょうか。

【小川】 岩手大学環境報告書へのイメージ・印象は、まず学内で作る対外的な報告書としては極めて読みやすいもので、絵とか写真が多い。

振り返ってみますと、当時の藤井学長・環境最高責任者が、「誰もが読みやすい報告書にしよう」という最初の大きな考え方が、現在も踏襲されていると思います。「毎年書かなければいけない、出さなければいけないものだからとにかくこなせばいい」とならなかったところが、先人たちの努力であり、最初に環境報告書のイメージを作り上げた最高環境責任者の人たちの功績と思います。

国立大学法人以外、例えば民間企業の環境報告書をみまると、全社的あるいは事業所的な、少なくともトップダウン型の仕組みです。報告書が書きやすい。投資もされ、それに見合った成果も出て、評価するための組織もきちんとあるのがはっきりしている。国立大学法人の場合、やっぱりボトムアッ

プ型の組織なので、施設管理課や安全衛生管理室などが動いていたり、あるいは我々と同じように受賞するところはどちらかというところとしたマネジメント関係の部署を作って専任職員を置いている。岩手大学にはいませんが。企業と比べたら、かなり内容的に見れば個別の活動に重心が置かれています。

岩手大学の環境報告書が他大学よりいいと思うのは、網羅されているのが全学的な取組です。多くの国立大学法人の場合、特定の学部や部局に偏った活動が環境報告書として取り上げられている。一部全学的なところが入って、冒頭に学長・最高環境責任者の巻頭言的なものがあったとしても、よくよく見ると特定学部の活動ばかりで、それが毎号続く。

岩手大学の環境報告書の優れた面は見やすいこと、全学の活動を取りあげていること、そこに学生たちが大きく寄与してくれていること。これら3点は誇ってもいいと思います。それが認められたと思います。教育機関として環境報告書を整えても、受賞には審査員の理解に年月がかかったと感じます。

- Q 環境マネジメント学生委員会の広報 Web チームが中心に制作している環境教育の映像資料にも、毎年、学生から小川先生へのインタビューという形で登場されています。当初から、環境マネジメント推進室長のインタビューが映像資料に盛り込まれていたことを現在でも踏襲されています。毎回、岩手大学の環境配慮活動について、全般的なお話をいただいております。収録の難しさのようなことを感じたりしますか。

【小川】 高いハードルがあるわけではないので、そんなに辛い思いをしているわけではありません。確かに映像記録として残って、配信されるわけです。岩手大学の仕組みですと、基礎ゼミや環境教育の科目で映像として映し出されます。私自身も見ることもあるわけですが、やっぱり恥ずかしいですね。

毎年、学生から質問を事前にある程度いただいた上で心の準備をします。その質問が代々違うという印象を持っています。今の学生が知りたい環境マネジメント推進室長への質問が反映されるので、それは1つ楽しみにしています。ギリギリになって持ってくるのはちょっとやめてほしいのですが。

学生さんが苦労して作られているものが配信されても見られない、使われないのが一番寂しいことです。単純に例年通り作る。キャンパスを写して、色々なデータを盛り込んだだけだと面白みがない。毎年、違う側面の質問に答えていて、たどたどしいところが入ってもいいと思っています。

岩手大学環境マネジメント学生委員会の評価

- Q 小川先生は、岩手大学の環境マネジメントシステム運営・環境配慮活動の成果の1つとして、環境マネジメント学生委員会の存在・活躍をあげておられます。

先ほど、環境マネジメント学生委員会の印象・認識をおうかがいしました。環境マネジメント学生委員会も2008年10月にできてから10年を迎える中で、執行部を始めとする学生は毎年変わっていきます。毎年、執行部あるいは中心的に活動されている学生さんのパーソナリティのようなものは違うと思います。改めて学生委員会に対する評価・印象をお伺いできますか。

【小川】 最初に環境マネジメント推進室長に就任した時、環境マネジメント学生委員会の活動に驚きました。これだけ活動している学生を教育者としてサポートしなければいけないという印象を非常に強く持ちました。

質問にもありましたように代々カラーは変わっていくわけですが、基本的な軸はきちっと申し送りされていていない。そこは学生の活動としては素晴らしいと思います。



通常、トップが変われば大きく舵が切られてしまうケースもあります。一旦舵を切れば、振り子でもいいですが、振ればまた反対側に振れてというように活動としては非常に不安定になるけれども、それが学生委員会にはない。学年を超えた縦の申し送り、意識の共有がしっかりなされている印象は強く持っています。

特に、学生委員会のリーダー的な存在の学生は当然色々な学部生で、しかも大学に入って1・2年の学生です。そのような学生たちが組織をまとめて、ある目標に向かって活動を進めていく。我々も見習わなくてはならないぐらいPDCAを回している印象を持っています。その学生たちが育っていくのが見えます。この背景を考えた時に、岩手大学のEMSは、サステイナブルキャンパスづくりだけが目的ではなくて、そこで育つ学生たちが在学している時、あるいは、卒業、修了して大学外に出た時に、ここで学んだ環境に関わる知識を活かしてくれる、あるいは、学生委員会のような組織で活動したことを経験として活かしてくれるような仕組みを作ることもEMSとして重要ではないか、それが高等教育機関に課せられた、ある面で本当のEMSではないかと感じています。CO₂を削減することはもちろん大切な活動であるけれども、大幅な投資ができないような中規模地域の地方大学の場合、なかなか毎年のように目標を達成することは難しい。教育に関しては、ある面で教職員がやる気になればできる。そこが一番重要と考えています。

そこがベースにあったので、例えば受賞式にも必ず学生を連れて行きたい。あるいは、学生が対外的な活動するときには積極的にサポートしたい。このような経験を積むと、学内での委員会活動に成長が見られます。学生にプラスワンの何かをしてあげることが僕の使命だと思っています。昨今は海外でのプレゼンテーションの機会を作っています。経費はかかりますけれども十分な教育効果はあると信念を持っています。

Q 千葉大学や三重大学の環境 ISO 学生委員会の活動そのものが単位になりますが、岩手大学にはありません。サークル的、ボランティア的な要素があります。それは、学生委員会誕生の成り立ちが違うので、現在まで引き続いているところがあります。環境マネジメント学生委員会の学生にとっては、各学部の専門科目や教養教育などで学ぶプラスαの活動をしています。その時点で意欲に違いがあ

る。そこをサポートしていく、学生参画のEMS運営につなげていく1つの仕組みになっていると思います。そこは大塚先生時代から引き継がれ、さらに海外の活動まで発展しています。

【小川】 ただ、対価の問題は少し別の観点で難しいところがあります。単位のために活動するのかということも1つあります。大学によって色々な考え方があっていいと思います。単位化を否定するものでもありません。4学部しかない岩手大学で部局調整をかけると何が上がってくるかというと、卒業要件です。ボランティア活動に関して、成績証明書に記載を加える。卒業要件に含めないけれど単位化をするとなりました。それでは、環境配慮活動をボランティア活動とどのように仕分けて単位化するかについて反対するものではありません。実際に、「これだけ活動しているのだから単位として認めろ」あるいは「なんらかの形で証明書の中に記載を入れてください」という学生からの要望、あるいは、指導している教員から上がってくれば十分検討の余地はあると思います。

Q EMSの運営を教育活動に反映させる仕組みの1つとして環境人材育成プログラムがあります。環境省の支援が3年間で終わった後に環境マネジメント推進室で継続しています。千葉大学や三重大学では学生によるEMSの活動と環境教育の認定プログラムをセットにしているところも違いです。環境マネジメント学生委員会の活動と環境人材育成プログラムで重なるところはありますが、二本立てで別に立てているというところは、EMSの運営を環境マネジメント学生委員会の活動以外で教育活動に反映させていく象徴的な取組と思います。

【小川】 そもそも一緒にしてしまう方が楽なわけです。環境人材育成プログラムのゴールである岩手大学学内認定資格「岩手大学環境管理実務士」の資格取得は非常に厳しいところがあります。それに向けて取り組もうと思っている人は所定の単位は当然とります。それとは別にもっと肩の力を抜いた、できる範囲内で行なえることをするような活動があってもいいと思っています。環境配慮活動に積極的に取り組んでいる大学がありますけれども、自分たちは自分たちのやり方でいいのかなと思っています。実際に担当されている教員などの意見も聞いて、こだわっているわけではないので。二本立てである方が教員・学生が取り組みやすいと思っていますところでは。

Q 大塚先生の後を引き継がれて環境マネジメント推進室長に就任されました。その後、1年間ぐらい離れられて、再度そして現在も推進室長を務められておられます。1年間の離れてみた後に推進室長を務められているところで、変化や違いのようなものを感じたことはありましたか。

【小川】 1年間離れたときにも部局の環境委員会委員長を務めていました。推進室会議にも出席していました。新理事の方も元々工学部だったので、1年間それぞれの申し送りをしながら1年間が過ぎていったので、ほとんど違和感はありませんでした。理工学部は全部を知っている人が委員長なので、部局として、構成員も活動しやすかったと思います。

もう1つは部局の温度がわかります。推進室会議を構成するメンバーと部局の温度は当然違ってきます。逆に言うと、やらされ的なところはやっぱり

非常に強い。

しかし、力の入れるところと少しゆったりと進めていいところが今まで分からなかった。全部に集中しよう、力を込めようとするので疲れ切ってしまう。そのようなところが少し緩和されたことが離れた 1 年間でありました。

1 年間離れてからまた戻って環境配慮活動をしています。次に戻った時は、活動のグローバル化を図る。これは学長の方針の「グローバルな大学を作る」こともあります。対外的な活動もしていこうという意識にはなりました。

環境パフォーマンスの遞減

Q 最初は、エネルギー消費量・廃棄物削減量・紙の枚数の削減で、全く何も取り組んでなかったところから活動することによって大きな成果が得られるのは往々にありがちなことです。それが長く続いていくとなかなか効果が現れにくくなってしまいう難しさは、活動に取り組めば取り組むほど突きつけられるハードル・課題になる。大学の活動が活発になればなるほどエネルギーや廃棄物量が多くなってしまふ。安全や健康など大事な価値とも整合を取らなければならない。その一方で、環境パフォーマンスもなるべく高めたい。ジレンマのようなことがあります。

岩手大学の EMS 運営を通して、毎年の環境報告書にも掲載されている環境パフォーマンスについて、環境マネジメント推進室長を務めてこられて、どのような認識を持ってこられたのかをお伺いできますか。

【小川】 難しい質問です。ただ、今の状況では増えるのはやむをえないという話にはならないと思っています。例えば、パリ協定をどのように実現するか。この先の時間がない状態になっている中で、地球温暖化防止対策は構成員全員の目標の 1 つとして取り組んでいかなければいけないと思っています。

昨今、北東北地方も夏が暑くなってきて、学生教育の観点でどうしても空調を入れなければ授業が実施できないところで、多くの教室にエアコンを装備することを進めています。ガス・電気の投入量が多くなることは明らかです。一方で、例えば CO₂ 排出量 1%削減の環境目標達成とのトレードオフをどのように整合させるかについて答えはありません。

大事なこととして、実データと意識は一緒に考える必要はないと思っています。1%削減しようと色々な形で努力する姿勢、構成員の意識は維持したい。ただ、実際のデータとして目標が守れなかったから、さらに PDCA サイクルでどこの部署をどうするかに関しては慎重な対応をしていきたい。

今は全学で取り組んでいるパフォーマンスを部局レベルで見てもらって、部局で PDCA サイクルを回してもらおう仕組みを取ってもいい。達成できているところもできていないところもある形で。CO₂ に関わる電気・都市ガスの排出源は要するに理系の学部になりますが、結局理系の学部に引っ張られてしまうので、理系の学部が多く使用すれば目標を守れない。逆に言うと、文系や事務系の部局は多少排出量が上下しても大学全体としてはほとんど影響を及ぼさないことになる、どこが本気で取り組んだ時だけ成果があがるのかという問題になる。大学全体の目標として CO₂ 排出量 1%削減とっておいて、各部局については前年度比で電力・都市ガス・重油などの使用量がどうなっているのかを見ていくことはあり得ます。そうすると部局単位で PDCA サイクルを回す意識が今よりはずっと高められると思います。そ

れを大学全体の環境パフォーマンスの向上に少しでもつなげていければと思っています。思っているだけでは難しいですけど。

簡単なのは目標数値を一番多い年にして、そこから削減に向けた取組をもう一度スタートする方法。それは何のためにするのか？数値を守るための目標設定と捉えがちです。削減意識の高揚にもつながりますが、その方法が正しいと今の段階では思えない。基準年を新たに高く持っていくよりは、部局別に環境パフォーマンスの設定を考えていくのが必要な方法だと思います。

岩手大学環境マネジメントシステム運営の展望

Q ここまで岩手大学の EMS 運営 10 年に関して、小川先生が関わってこられたところで色々とお話を伺ってきました。最後に、岩手大学 EMS の今後の展望・展開についてのお話が伺えればと思います。

岩手大学の EMS 運営方針として、現在、エコアクション 21 の規格で運営している EMS を大学独自の取組に切り替えていくことが示されています。あとは、岩手大学環境マネジメント学生委員会を始めとする EMS の運営・環境配慮活動と、教育活動をいかにリンクさせていくか、これまで行ってきたことを今後どのように進めていくか。環境パフォーマンスをどのように高めていくかも課題としてあります。長年取り組んでいくことによるマンネリ化が避けられない状況の中でどのように続けていくか、創意工夫のようなものが今後求められていくところもあるでしょう。そして、岩渕学長の方針であるグローバルの取組を含めたサステイナブルキャンパスをどのように実現していくかも大事になってきます。

【小川】 環境マネジメント推進室は当初から「特定事業推進」の形で進めてきました。特定事業推進は当然マンネリ化するので、時限を切った方がいいとは思っています。ISO14001 認証取得で 2 期 6 年、エコアクション 21 認証取得 2 期 4 年ですから、EMS の運営を 10 年間、2 つの規格でトレーニングしてきたことになったわけです。さらに別の規格というよりは、岩手大学で一体何を残して何をやめるかという活動を絞り込むことは必要だと思っています。

ただ、社会情勢を考えると、地球環境問題に端を発して環境に関わる活動が高等教育機関だから、時限だから終了していい話にはならない。逆に言えば、さらに人材を育成する観点からすれば、より強化していかないといけない時代に入ってくるということは明らかですね。

そのような中で、岩手大学として将来どうするか。まずエコアクション 21 について、あともう 1 回更新審査を受けて 2 年間動かす。そのうち後半は、自立化に向けてどうしていくかを含めた活動になっていくと思います。環境マネジメント推進室という組織を今後どうしていくのかも含めて考えていかなければいけない。環境マネジメント学生委員会との関係、環境教育科目をどうしていくかも含め、整理していかななくてはならない時期になると思っています。

根幹にある考え方としては、この活動は時限で行うものではないと思っていますので、どのような形での着陸のさせ方をするか。ただ、区切りはつけなければいけないと思っています。自立化のタイミングとして、ISO14001 認証取得後 10 年で決めなければいけないと思っています。

「第21回地球環境大賞」文部科学大臣賞受賞 2012（平成24）年4月

2012年2月29日に、岩手大学は、フジサンケイグループが主催する「第21回地球環境大賞」の「文部科学大臣賞」を大学として初めて受賞しました。10年以上にわたる「持続可能な社会の形成に貢献する人材育成の推進」が評価されたことによるものです。

地球環境大賞は、1992年に「産業の発展と地球環境との共生」をめざし、産業界を対象とする顕彰制度として、公益財団法人世界自然保護基金ジャパン（WWF ジャパン、名誉総裁・秋篠宮殿下）の特別協力を得て創設されました。地球温暖化防止や循環型社会の実現に寄与する新技術・新製品の開発、環境保全活動・事業の促進や、21世紀の社会システムの探求、地球環境に対する保全意識の一段の向上を目的としています。

2012年4月24日には、秋篠宮同妃両殿下ご臨席のもと、東京都元赤坂の明治記念館で、第21回地球環境大賞授賞式が挙行されました。藤井克己学長（当時）、小川智理事（環境担当）・副学長（当時）、鷹屋敷ありさ岩手大学環境マネジメント学生委員会委員長（当時）を始め、環境マネジメント推進室事務局員や環境マネジメント学生委員会委員など岩手大学環境マネジメントの関係者総勢19名が授賞式とレセプションに出席しました。

授賞式前には、藤井学長・小川理事・鷹屋敷委員長の3名が他の受賞企業関係者と一っしょに、明治記念館内の庭園で秋篠宮同妃両殿下と懇談しました。また、レセプションでは、鷹屋敷委員長を始めとする環境マネジメント学生委員会委員と秋篠宮同妃両殿下が親しくご懇談される場面もありました。



『岩手大学環境報告書 2013』8ページを修正。

第3代・環境マネジメント推進室長 西谷泰昭先生 インタビュー

環境マネジメント推進室長任期：
2014年（平成26年）4月
～2015年（平成27年）3月

聞き手

中島清隆（環境マネジメント推進室
副室長）

赤谷隆一（環境マネジメント推進室員
／技術部技術室長）

インタビュー日時：

2018年（平成30年）12月20日



岩手大学環境マネジメントシステム運営との関わり

【西谷】 2014年に環境マネジメント推進室長に就任した時には、もう環境マネジメントシステム（EMS）体制ができていました。任期が1年なかったわけですが、もう1年あれば、次回のISO14001更新審査をどうするかということが多分話題になるだろうと思って、勉強し始めた頃でした。

室長就任の前年にあったISO14001更新審査に関わりました。ある意味でシステムティックにEMSが進むようになっていたので、ISO14001の更新をもう1回続けてもいいという気持ちを当時の（堺）学長と私は思っていました。小川（智・第2代環境マネジメント推進室長）先生からは、ISO14001は大変だから次回の更新はもう少し考えた方がいいかもしれないと引き継いではいましたが、その時点で検討するほどの知識はありませんでした。

実際に室長になってみると、笹尾（俊明・現：人文社会科学部教授）先生、颯田（尚哉・農学部教授）先生がワーキング・グループで動いていて、定常的な仕事はほとんど任せていても大丈夫な感じだったので、これならもう1期くらいISO14001を続けてもいいということはありませんでした。

Q ISO14001をもう一回更新して、その後に岩手大学独自の取組で進めるかどうかを検討されてはいませんか？

【西谷】 具体的な検討はしてなかったね。2013年にISO14001の更新があって、次は3年後。理事の任期は多分その辺まで続くだろうから、あの時点では私のスコープに入っていたわけです。だからEMSの自主運営をするかしないかの決断はその期間にあるはずだったけれども、まだその検討するところまでいっていない。多分お二人は前の小川先生と「次は自前で」というようなことを話されていて、私も小川先生から聞いていたからそうなのかなと思っていました。ただ、自主運営だとまた新しく考えなければいけなくなって大変だろうし、ISO14001での先延ばしも1つの方法と思っていました。

Q 先ほど先生がおっしゃられたように、ある程度 EMS の形ができた中でそのまま続ける方が実は楽だったりします。大学独自の運営は別のチャレンジをやっぱり行うことになります。先生の環境マネジメント推進室長の任期は 1 年間でしたけれども、岩手大学で EMS の自主運営ができそうだという可能性を感じられたことはありましたか？

【西谷】 ISO14001 は要するに強制力がある。構成員に外圧でできる。最初に、強引に進めたのは正解だったかもしれない。トップが引っ張らないと学内がなかなか動かなくて、あなたたちみたいな担当者がいくら頑張っても辛いことになる。だから、独自運営は本当に難しいと室長就任前は思っていました。学内全体が積極的に ISO14001 による EMS 運営を継続して、さらに理想が向かって動いていくようになるのが本当だと思っていました。就任前の個人的な印象は、本部と EMS の学生はいても学部の教職員がいない・本部が学生を使って無理に行っているというようなものでした。

ところが、私が環境マネジメント推進室長になった時に、教職員のワーキング・グループがちゃんと動いていたので驚きました。立ち上げ時の大塚(尚寛・初代環境マネジメント推進室長)先生、体制を整備した小川先生がいて良かったのだと思います。このような人たちがいたから、うまくいっていたような気がしますね。あとは笹尾先生とか颯田先生が一生懸命に取り組んでいらっしゃいました。

『環境報告書 2014』の編集後記に、「部局ユニットから関わってきたけど今度は旗振り側になりました」と書きました。「多くのメンバーの積極的な活動があって初めて細部が回っています」。本当にこの通りです。「問題はその積極性を継続的に続けるにはどうしたら良いかっていうその一点だと思います」ということが、その時思ったことなのだろうね、きっと。室長が特に何もしないで回っていたから。

Q 工学部という 1 つのユニットで EMS に取り込まれていた時から、大学全体を対象とする立場に就かれて、扱う範囲も広がるわけですが、戸惑いなどはありましたか？

【西谷】 戸惑いというより、環境マネジメント学生委員会をどのような位置付けにすべきか、また、学生にとってその活動の意味はどのようなものなのかなどがすっきりしていませんでした。工学部にいた時、学生はすごい大きな構成員なわけですが、学部は学生委員会のような仕組みを持っていない。

学生も含めて教職員と同じ土俵で話をしなければいけないことは分かるけれども、教職員がしなければいけないことを学生にさせているだけではないかという気持ちはありました。教職員がすべきことを熱心な学生がしてくれて、それにうまく乗っかって話を進めていくのは方法としてもあってもいいと思っていたし、その頃の国立大学では学生の力をどう使うかが EMS に限らず課題としてあった。ただ、自分は古い人間で、自分が学生の時は何もそんなことしなくて、お客さんだった。だから、学生がどのような気持ちで取り組んでいるのかちょっと分からなかった。

最初は、環境マネジメント学生委員会が 20 人くらいから始まったのに、100 人を超えて、ますます訳が分からなくなった。20 人くらいだとサーク

ル活動のノリがある。ところが 100 人になると、今度は学生の組織を動かさなければいけなくなって大変だと思う。先生だって大学全体の組織を動かすのに四苦八苦しているのに、学生はどうするのだろうかと思いました。

Q 毎年、作成している環境教育用映像も環境マネジメント学生委員会が担当しています。先生にもインタビューを受けていただきました。

【西谷】 学生は入れ替わっていく。何年か経てば面白いアイデア出す学生が出てくる。組織はそうじゃない？大体同じことをして、何年か経つと少し頑張る学生が出てきて、何か新しいことを始めるとそれからまた続いていって、だんだん良くなっていく。スピードは遅いけれども、継続性の点ではその方が本当はいいのかなと思います。



だから、10年経って、学生達がどういう風変わったのかは気になるところではあるよね。今も環境マネジメント学生委員会室はありますか？

【中島】 先生がインタビューを受けられた同じ場所にあります。ただ、所属学生が100人を超えていると、委員会室では会議などできないので、教室を借りて行っているようです。

所属学生を100名に増やそうと、当時の委員長・執行部が意識的に取り組んでいたところがありました。それは大きな変化でした。それまでは20名くらいでした。

【西谷】 当時、教授会でも報告をしていて、学生委員会の組織みたいなことはどのように考えているのかと聞いたら、学生は全然ピンとこなかったみたい。まだ所属学生が20人の時で、もっと増やしたいと言ったから、増やすとそのようなことをちゃんと考えなければいけないのかなと思って聞いたら、単に所属学生を増やしたいとのこと。

学生が増えると決まったことをするには非常にいい。割り当てて実施すればちゃんと動く。でも、下から盛り上がるようなことはなかなか。あとは機動力がない。20人くらいだと、あれもやろう、これもやろうということが出てくる。

【中島】 委員長を中心とするカラーみたいなのは毎年出てくると思います。10年くらい続けていることもありつつ、新しい取組も出てきています、本当に取り組もうとする学生がいるかどうか。そこは、少しサークル的なものを残しているのが、岩手大学の環境マネジメント学生委員会の特色であるように思います。千葉大学や三重大学は講義の一環として、環境マネジメント活動を単位認定しています。どちらがいいのかは、なんとも言いえないところです。

- 【赤谷】 当時は、国内の千葉大学・信州大学にしか、学生委員会も行ってなかった。その後、韓国や中国に行っていて、活動発表しているので、その意味では学生の刺激になってきているかもしれない。
- 【西谷】 彼らの勉強はどうしているの？ 環境についての勉強は、例えば1年生の時、環境という言葉だけに惹かれて手をあげたけれど、しているのがボランティア活動だけだったら、なんのためにしているのだろう？と思って。それは先輩が教えるの？それとも授業などがあって、そういうところで聞いたりするわけ？
- 【赤谷】 チームごとに勉強会はしていますね。ゴミ分別とか。
- 【西谷】 例えば外から人を呼んできて、謝金を払ってあげて、勉強できる機会を学生が自分で作って、それを支援するのはいいかもしれないですよ。
- 【西谷】 環境マネジメント学生委員会から巣立った学生は、今、何をしていますか？
- 【中島】 卒業、就職して。
- 【西谷】 同窓会みたいなのをしていたよね。
- 【赤谷】 OB会をしていますね。公務員になった卒業生で、環境関連の部署に入っているのが何人かいます。
- 【西谷】 そういうのはあるよね。それは一体何だろうね。大学でバンドをサークルでしていてミュージシャンになったようなものかね。
- 【中島】 学士号がベースの価値とすると、付加価値でしょうか。環境人材育成プログラムは付加価値だろうと思っています。学部専門科目や教養科目がベースにあって、そこに付け加えられるサークル・ボランティアなどの1つである。そういうことに取り組む学生と、取り組まない学生では違いが出るだろう。あとはそれを行政機関や企業からどのように評価してもらえるかというマッチングの問題があります。

今後の岩手大学の環境マネジメントシステムの運営について

Q 岩手大学のEMS運営を10年続けてきました。先生には1年間、環境マネジメント推進室長を担当していただきました。

このあと10年続ける方向として、EMSの自主運営が方針としてあるので、そこを見据えて進んでいく話になります。先生が推進室長を担当された時は、EMSが確立された時期で、関係者が熱心に取り組んでいるところもありながら続けてきた。中間地点だったと思われます。

10年続けてきて、地方大学そのものが変わってきている状況で、大学でのEMS運営、環境配慮活動、教育・研究活動をどうしていくか。

10年活動してきたものをこれからも続けていって、さらに新しい取組をしていくことになるので、負担が増えるので、どのように軽減していくかが、すでに現在の課題でもあり、今後の課題にもなるでしょう。

また、活動に取り組めば取り組むほど基本的に効果は少なく、出なくなっていく。ヒトやお金などの資源はたくさんあるわけではないので、その中でEMSの運営を続けていくために、創意工夫や知恵などを入れていくことも課題になると思います。

ます。

岩手大学のEMSにおける次の10年について、アドバイスやヒントなどをいただけますでしょうか？

【西谷】 環境について、全ての学生・教職員が知っていればいけない、それを意識して動いていかなければいけない。それはその通りだけど、その中に環境の体系にちゃんと取り組んでいる人たちがいる程度いなければいけないと思うのね。これは多分岩手大学くらいの規模だと難しいかもしれないけれど。

なぜヨーロッパは環境について要求が厳しいのか、日本の現状はどうかなどについて答えられる集団が岩手大学にいないと、この先はなかなか進められないと思う。歴史を見ながら、現在を把握した時に、環境の取組で日本が遅れている、それはヨーロッパの環境規制よりは緩いという意味かもしれない、ヨーロッパのように進むことが正しいのか、世の中の流れとして揺り戻しはあるのかというようなことをちゃんと話せる人たちがいないと難しいかなという気がします。

岩手大学の人数ではちょっと難しいだろうとは思いますが。例えば、環境活動は素晴らしいと言わせるためには、話したようなことが本当はなければいけないのだろうなというのが最初に思ったこと。

また、結局ルーティンワークになっているところが多くあって、それをいかに省力化していくかとなると、全体的に考える人がいなければいけないけれど、それができない、部署が分かれているために、ルーティンワークをちゃんと継続してやるのが色々なデータにもなる。それが一番大事かなと思います。

その上で、数値目標については、減らさなくてよくて、増やさない、あるいは、きちんとしたルーティンワークがあった上で、例えばここから5年間は「別にこういう数字を見ましょう」と、その終わりを決めて、いくつか走らせる。いくつか考えればいいと思う。「今年はこれをします」「来年はこれをします」というより、もう少し長いスパンでできればいいと思う。

例えば、Aについて取り組もうとする。今年から5年間しますと言って、構成員そのAについて知るのが5年後くらいの話。大学はそういうところがある。だから、ちょっと辛いかなと思うけれど、そのように行動するしかないと思う。

「サステイナブルキャンパス推進協議会第 2 回サステイナブルキャンパス賞 2016 「学生活動・地域連携部門賞」受賞 2016（平成 28）年 11 月



2016年11月29日、岩手大学が「サステイナブルキャンパス推進協議会（CAS-Net JAPAN）第2回サステイナブルキャンパス賞 2016 学生活動・地域連携部門賞」を受賞しました。

CAS-Net JAPANは、日本国内のサステイナブルキャンパス構築の取組を推進し加速させ、持続可能な環境配慮型社会の構築に貢献することを目的としています。岩手大学と岩手大学環境マネジメント学生委員会は、CAS-Net JAPANの会員となっています。

昨年度から、サステイナブルキャンパス賞を開始。キャンパスのサステイナビリティに配慮した「建築・設備部門」、キャンパスのサステイナビリティに配慮した「大学運営部門」、キャンパスのサステイナビリティに配慮した「学生参画・地域連携部門」を設けています。岩手大学は、「学生活動・地域連携部門」で、第2回サステイナブルキャンパス賞を受賞しました。

同日、立命館大学大阪・茨木キャンパスで開催されたサステイナブルキャンパス推進協議会 2016 年次大会（第4回）において、授賞式が挙行されました。岩手大学からは教職員2名・環境マネジメント学生委員会4名が参加。岩手大学環境マネジメント学生委員会の西田ゆうき委員長（人文社会科学部2年）に賞状と記念品を授与されました。講評では、岩手大学環境マネジメント学生委員会による学生参画のエコキャンパスづくりと岩手大学環境人材育成プログラムが、サステイナブルキャンパスの実現とサステイナブルコミュニティへの地域貢献に成果をあげられていると高く評価されました。

授賞式後、受賞団体によるプレゼンテーションが行われました。岩手大学からは、環境マネジメント推進室副推進室長と環境マネジメント学生委員会の小原吉功・副委員長（農学部1年：当時）と皆川錬・副委員長（理工学部1年：当時）が、同委員会の活動を中心に発表しました。

岩手大学ニュース 2016年11月

「岩手大学が「サステイナブルキャンパス推進協議会第2回サステイナブルキャンパス賞2016 学生生活動・地域連携部門賞」を受賞しました 掲載(更新)日時:2016-11-30 17:00:00」を修正。

「第19・20回環境コミュニケーション大賞」「環境配慮促進法特定事業者賞(第19・20回環境コミュニケーション大賞審査委員長賞)」受賞 2016(平成28)・2017(平成29)年2月

岩手大学は、優れた環境コミュニケーションを表彰する「第19回環境コミュニケーション大賞」(環境省と一般財団法人地球・人間環境フォーラム主催)で、「環境配慮促進法特定事業者賞(第19回環境コミュニケーション大賞審査委員長賞)」を受賞しました。

「環境コミュニケーション大賞」は、優れた環境報告書等や環境活動レポートを表彰することで、事業者などの環境経営及び環境コミュニケーションへの取組を促進、環境情報開示の質の向上を図ることを目的とする表彰制度と説明されています。

岩手大学は、「環境情報の提供の促進等による特定事業者等の環境に配慮した事業活動の促進に関する法律(環境配慮促進法)」に準拠し、『岩手大学環境報告書2006』から毎年度、環境活動について大学内外に公表する環境情報開示・環境コミュニケーションを行っています。

このたび、『国立大学法人岩手大学環境報告書2015』が、「第19回環境コミュニケーション大賞」のうち、「環境報告書部門」「環境配慮促進法特定事業者賞(第19回環境コミュニケーション大賞審査委員長賞)」を受賞いたしました。初めての受賞になります。

岩手大学の環境報告書は、環境マネジメントシステムの運営と同じように、教職員と学生が参画して作成されています。具体的には、岩手大学環境マネジメント推進室(特に環境教育ワーキンググループ)と岩手大学環境マネジメント学生委員会(特に環境教育チーム)がいっしょに環境報告書の検討・作成を行っています。このような教職員と学生の協働による環境コミュニケーション活動が高く評価されたものと見られます。



2017年2月22日、グランドプリンスホテル新高輪3階「天平」で、「第20回環境コミュニケーション大賞（環境省と一般財団法人地球・人間環境フォーラムの共催）」表彰式が行われました。岩手大学は、『国立大学法人岩手大学環境報告書2016』で、「環境報告書部門」「環境配慮促進法特定事業者賞（第20回環境コミュニケーション大賞審査委員長賞）」を受賞しました。

岩手大学からは、環境マネジメント推進室副室長、岩手大学環境マネジメント学生委員会（EMSC）環境教育チーム前リーダー・現リーダーが出席。EMSC環境教育チーム現リーダーに賞状が授与されました。

講評では、「環境マネジメント学生委員会の学生と教職員が協力して作り上げた点も素晴らしい」と記載され、これまでの環境関連受賞と同様に高い評価をしています。

岩手大学ニュース 2016年2月

『国立大学法人岩手大学環境報告書2015』が「第19回環境コミュニケーション大賞」【環境報告書部門】【環境配慮促進法特定事業者賞（第19回環境コミュニケーション大賞審査員賞）】を受賞しました 掲載（更新）日時：2016-02-10 15:00:00」を修正。

2017年2月

「第20回環境コミュニケーション大賞」授賞式が行われました：『岩手大学環境報告書2016』「第20回環境コミュニケーション大賞」「環境報告書部門」「環境配慮促進法特定事業者賞（第20回環境コミュニケーション大賞審査委員長賞）」受賞 掲載（更新）日時：2017-02-23 16:00:00」を修正。

第2・3回サステイナブルキャンパス・アジア国際会議（ACCS：Asian Conference of Campus Sustainability2016・2017）“Excellence Award” “Excellent Influence Award” 受賞 2016（平成28）年11月・2017（平成29）12月



環境マネジメント学生委員会の三上華永さん（人文社会科学部 2 年：当時）、橋内春名さん（人文社会科学部 2 年：当時）が 2016 年 11 月 5 日・6 日に、中国山東省済南市にある山東建築大学で開催された 2nd Asian Conference on Campus Sustainability で Excellence Award を受賞しました。

2 人は、本学が目指しているサステイナブルキャンパス構築に向けて、日頃環境マネジメント学生委員会の取り組んでいる省エネ省資源活動やグリーンカーテンの設置、ステークホルダーへの環境教育活動等についてポスター発表を行い、本賞を受賞しました。

2017 年 12 月 10 日、京都大学吉田キャンパス国際科学イノベーション棟で開催された「第 3 回サステイナブルキャンパス・アジア国際会議（ACCS）パラレルセッション「セッション 1 学生発表」で、岩手大学環境マネジメント学生委員会（EMSC）所属学生 2 名による発表が、Excellent Influence Award を受賞しました。

セッション 1 では、日本から岩手大学を含む 4 大学、韓国 2 大学、中国 1 大学、計 7 大学の大学生・大学院生によるサステイナブルキャンパスやエコ・グリーンキャンパスに関する学生発表が行われました。

岩手大学環境マネジメント学生委員会（EMSC）からは、村木広智さん（理工学部 2 年：当時）と玉木穂香さん（人文社会科学部 1 年：当時）が英語で EMSC の活動を発表。質疑応答も行われました。

日本・韓国・中国・タイからの審査員 4 名と聴衆による学生発表の評価が行われた結果、岩手大学は Excellent Influence Award を受賞しました。

岩手大学ニュース

2016 年 11 月

「環境マネジメント学生委員会三上華永さん、橋内春名さんが 2nd Asian Conference on Campus Sustainability で Excellence Award を受賞 掲載（更新）日時：2016-11-17 10:00:00」を修正。

2017 年 12 月

「第 3 回サステイナブルキャンパス・アジア国際会議（ACCS）学生発表で岩手大学環境マネジメント学生委員会所属学生 2 名が Excellent Influence Award を受賞しました。掲載（更新）日時：2017-12-11 13:00:00」を修正。

環境マネジメントシステム規格エコアクション 21 認証取得 2017（平成29）年12月

岩手大学は、一般財団法人持続性推進機構が事務局を務める環境マネジメントシステム規格「エコアクション21」を、東北地方の国立大学法人で初めて認証取得しました。

2018年1月23日に、森下研・エコアクション21中央事務局長、林俊春・エコアクション21地域事務局「銀河」理事長がご列席のもと、岩手大学エコアクション21認証登録授与式が行われました。認証登録授与式には、岩淵明・岩手大学長、小川智・岩手大学理事・副学長兼環境マネジメント推進室長、岩手大学環境マネジメント学生委員会委員長1名・副委員長2名が出席。岩手大学の環境マネジメントシステムは、エコアクション21の規格に沿って運営されていることが認められたことに加え、教職員と学生の参画・協働によって進められていることを象徴する機会・場になりました。



岩手大学ニュース 2018年1月

「岩手大学は環境マネジメントシステム規格「エコアクション21」を東北地方の国立大学法人で初めて認証取得しました。掲載（更新）日時：2018-01-24 17:00:00」を修正。